発表タイトル	自然葬における追悼行為 ―死者の自己実現と生者の自己回復をめぐる葛藤―
発表者所属名	地域文化学専攻
発表者氏名	金 セッピョル

葬送儀礼は、死者をあの世へ送り、成員の喪失という状態から共同体を再現する通過儀礼であることが、数々の先行研究で指摘されてきた。それが近年の日本では死の個人化が進み、葬送儀礼は死にゆく者の最後の自己実現手段として位置づけられるようになっている。生者も遺族という共同体ではなく個人として死と向き合わなければならない上、自己実現手段としての葬送儀礼では残された生者への視点が抜け落ちがちであるため、葛藤を増している。このような状況の中、生者たちはどのように自己回復のための儀礼を生み出しているのであろうか。

本発表では、自己実現手段として行われる傾向が顕著である自然葬（粉末化した焼骨を海、山などに撒く遺体処理とそれに付随する儀礼）を中心に、生者たちの試みを紹介する。葬送儀礼は臨終から葬式、埋葬（散骨）、そして追悼行為までを含む広い概念として扱うが、ここではその中でも追悼行為に焦点を当てたい。

代表的な追悼行為として墓参りが挙げられる。墓参りは供養という意味を持ちながらも、実際には墓が死者の住処として認識されることによって死者を追悼する場にもなってきた。自然葬の場合、全遺骨を撒いたら墓は存在しないが、撒いた後、特定の時期に死者と関連のある場所に行く行為が確認された。ただ、墓がないことから、命日・彼岸・お盆／墓地などの墓参りの時空間は解体されている。そして新たな追悼の時空間が模索されているが、死者の状態と居場所についての観念が定まっていないため葛藤している姿が見られた。葛藤の結果としては、日常的な時間と場所が選択される傾向が目立つ。その他、生者の身近に死者の寄り代と認識されている物が複数存在し、日常食や日常的に使う物が供えられる事例が多かった。これは仏壇における供養と類似しているところがある。

自然葬において生者が行っている追悼行為は、既存の儀礼構造を残しながらも、行為の内容は新たに工夫されている。その内容の特徴としては、死者が生者の世界から分離されないまま、生者の身近な存在として留まることが指摘できる。このような傾向は墓という死者の空間とそれに付随する死後観がない代わりに、日常に死者を積極的に取り込むことによって自己回復を図ろうとするものと解釈できるのではないか。

ただ、これは自然葬だけでなく、仏教的死後観が衰退した近年の葬送儀礼にある程度共通している可能性がある。また、既存の儀礼の構造を残していることについて自ら矛盾を感じたり、ほとんど儀礼を行っていない事例もあり、今回確認された儀礼の構造さえも解体していくことが考えられる。今後さらなる検討が要請される。